John Steinbeck: *The Grapes of Wrath*, Chapter 10

Ma cleared her throat. “It ain’t kin we? It’s will we?” she said firmly. “As far as ‘kin,’ we can’t do nothin’, not go to California or nothin’; but as far as ‘will,’ why, we’ll do what we will. An’ as far as ‘will’—it’s a long time our folks been here and east before, an’ I never heerd tell of no Jords or no Hazletts, neither, ever refusin’ food an’ shelter or a lift on the road to anybody that asked. They’s been mean Joads, but never that mean.”

母親は咳ばらいした。「大丈夫かどうかって問題じゃないよ。やるつもりがあるかどうかの問題だよ」彼女は、きっぱりと言った。「『できる』かどうかなんて言ったら、あたしたちにゃ、何もできやしないよ。カリフォルニアへ行くことだって、何をすることだって、できやしないよ。だけど、『しよう』ということだったら、なあに、あたしたちは、しようと思ったことは、するだけだよ。そして、『しよう』ということについてなら、あたしたちが昔、東部にいたときからも、またここへきてからも、ジョード家の人間でもハズレット家の人間でも、一度だって、誰かに食事や宿や、道で車などを頼まれたとき、ことわろうとしたことはなかっただよ。そりゃジョード家にだって、性悪な人間もいたけれど、それほどひどいやつは、一人だっていやしなかったよ」

「怒りの葡萄」大久保康雄訳　新潮文庫（上）201 ページ